75 ロバーツ 『ロンドンの呼び売り』

Roberts, William. The cries of London. London, The Connoisseur, 1924. 14p. 13 plates 32.0×25.3cm 〈383.133-R〉

Hiler p. 753　　Beall E21

本書は英国史の流れにそって，呼び売りと各時代のかかわりを概観したもので，著者ロバーツの優れた学術的考証と18世紀英国画壇の重鎮ウィートリー（F. Wheatley 1741—1801）の原画による13枚の美しい彩色点刻銅版画によって多くの類書を凌駕した著作として知らされている。

物売りは18世紀に隆盛を極めたが，産業革命を経て淘汰され，19世紀にはごく一部を残すのみとなった。こうした時代の転換期に，ウィートリーの才筆を得て，古き良き時代の呼び売りの画趣に富んだ情景を記録できたことは，後世にとっての幸運といえよう。ウィートリーの描いた呼び売りは全部で14点あり，制作年代は1792年に6点，1793年に6点，1795年に2点である。これらは最初から版画のための原画を意図して描かれ，この内13点を1793年から1797年にかけてヴェンドラミニ（G. Vendramini）をはじめとする一流の版画家達5人が版画化し，ロンドンのColnaghi社から出版した。本書は，1924年に収集家のためのシリーズの中の一冊としてConnoisseur社から出版された。図版は上記のリプリント版である。呼び売りを描いた図版集は他にも多いが，概して芸術性にかけるものが多い中で，ウィートリーの呼び売りは愛らしく気品があり，雅趣に富んだ独特の雰囲気を持っている。また彼の作品は，呼び売りを単独で描かず，常に複数の人物を登場させて画面に物語性を持たせている。日常生活のありふれた対象を優れた表現力で芸術的香り高い作品に仕上げた彼の呼び売りは，大変な人気を呼び，版を重ねた。ストッダート（E. Stodart）のメゾティント版をはじめ，著名な版画家の手で度々版画化され，愛好家の間で高い評価を得ている。グランディ（C. Reginald Grundy）は，本書の序文にこれらの13枚の物売りの適切な解説を記している。1796年にヴェンドラミニ（G. Vendramini）によって銅版画化されたNo. 12の「しょうが入りケーキ」売りの図版には2種類ある。通常5人の人物が建物の右側にいる図で，珍らしい方の図版は2番目の女性が菓子車のそばに立ち，右側の背景にはCovent Gardenのセント・ポール教会らしい建物が描かれている。

ウィートリーは，ロンドンのCovent Gardenで仕立屋の息子として生まれた。若い頃から画家としての天分を認められ，モーティマー（J.H. Mortimer）について修業した。上流社会に出入りし，洗練された優雅な生活を愛したが，こうした生活を維持する為に莫大な借金をし，呼び売りの図集も借金返済の手段として出版されたものだという。庶民の日常生活に題材を求めた肖像画や風景画を描くかたわら，美術館の装飾絵画も手がけ，1784年以降ロイヤル・アカデミーの正会員として画壇に重きを成した。今日では，もっぱらThe cries of Londonの作者として知られる。（内野）